

追跡アンケート調査（抜粋）

(1) 調査対象

- ア 平成28年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動をした小学生及び中学生の在籍校の教職員
- イ 平成28年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動をした児童生徒の保護者

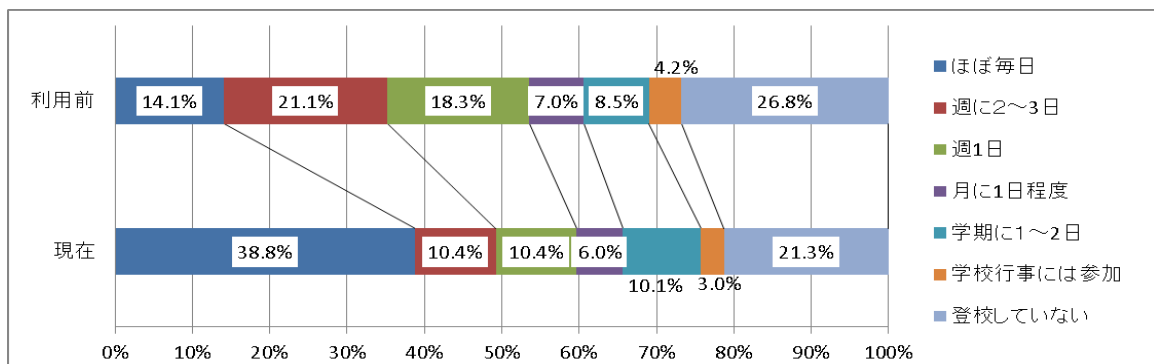
(2) 調査時期

平成29年6月～8月

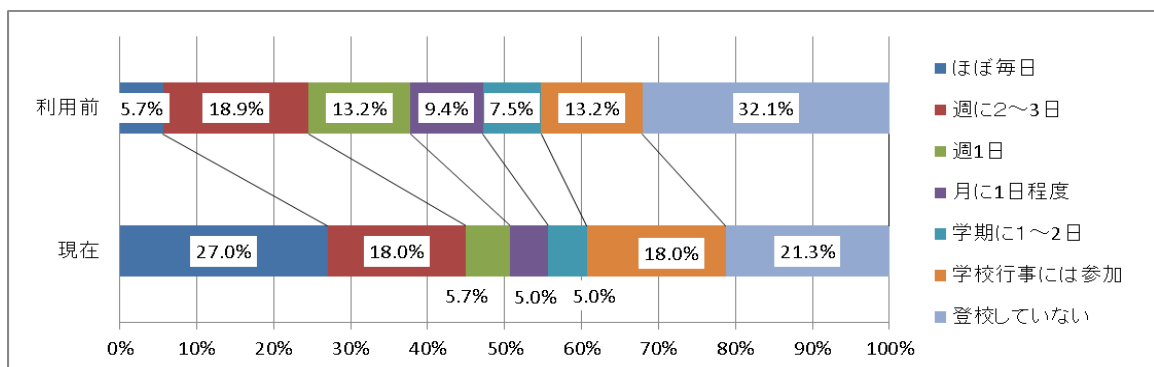
(3) 調査結果

ア 登校状況について

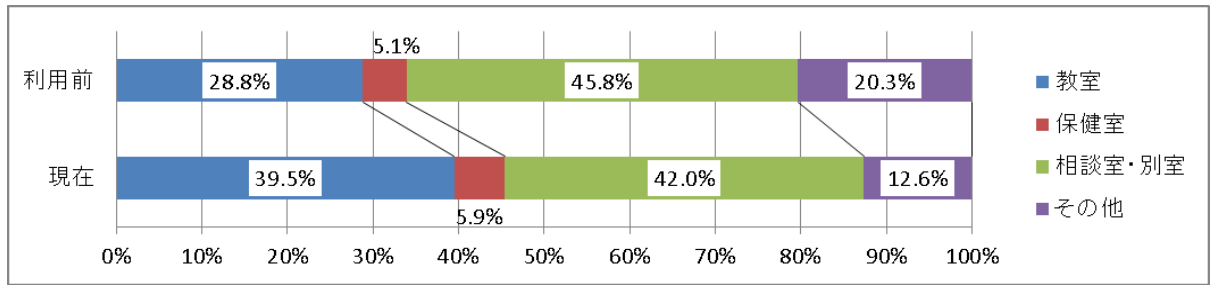
登校状況については、利用前においては、ほぼ毎日登校している割合が、学校用アンケートでは14.1%（図1）、保護者用アンケートでは5.7%（図2）であったのに対して、利用後においては、学校用アンケートでは38.8%と増加し、保護者用についても、27.0%と増加している。登校後の主な居場所についても教室の割合が10.7%増加し（図3）、登校している時間帯については、およそ1日中の割合が8.4%増加している（図4）。これらの結果から、多くの児童生徒が当所の利用後に確実に学校復帰に向けて動き始めていること、また本人の状態に応じて登校時間を伸ばすなど登校に対する意欲が高まっている様子が分かる。



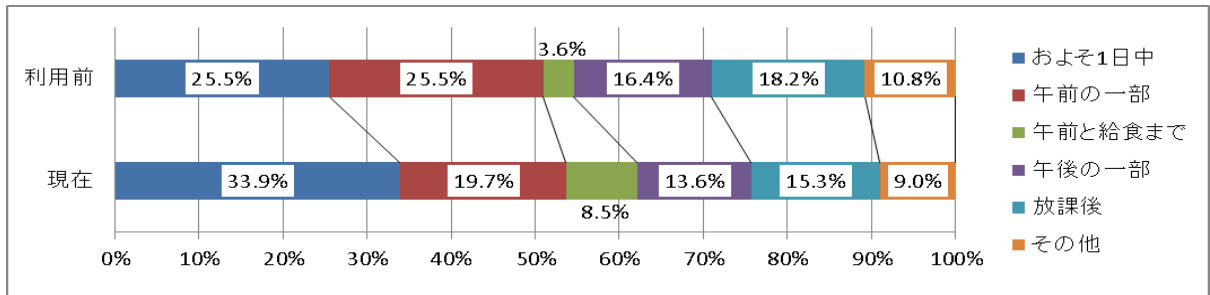
〔図1〕 登校状況（学校用）



〔図2〕 登校状況（保護者用）



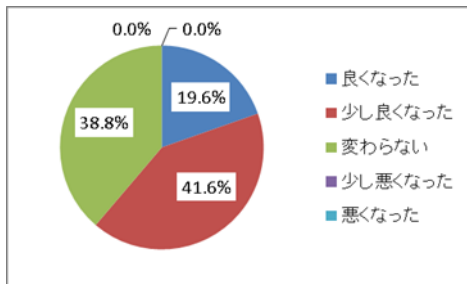
[図 3] 登校後の主な居場所（学校用）



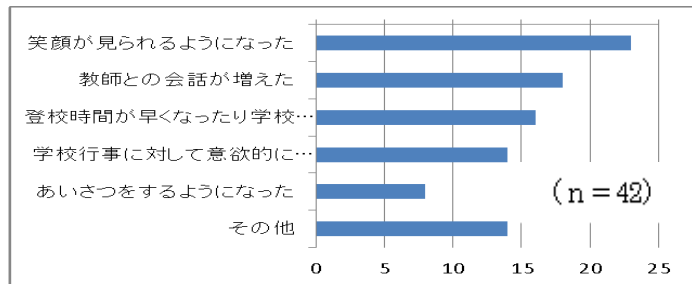
[図 4] 登校している時間帯（学校用）

イ 生活の様子について

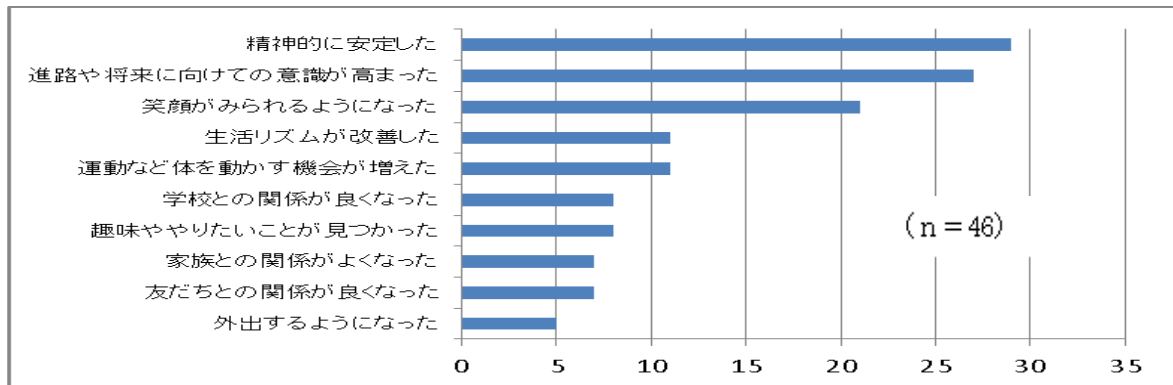
学校生活の変化では「良くなった」「少し良くなった」を合わせた割合が学校では61.2%と高い（図 5）。特に笑顔が見られるようになったり、教師との会話が増えたりといった対人関係に改善が見られる（図 6）。家庭においても様々な改善が見られる。当所利用により精神的に安定し、笑顔がみられるようになった児童生徒が多いことが分かる（図 7）。また、進路や将来へ向けて意識が高まったという回答が多く、精神的に安定したことが次のステップに向かう意欲につながったものと考えられる。



[図 5] 学校での生活の変化（学校用）



[図 6] 学校での改善内容（学校用）

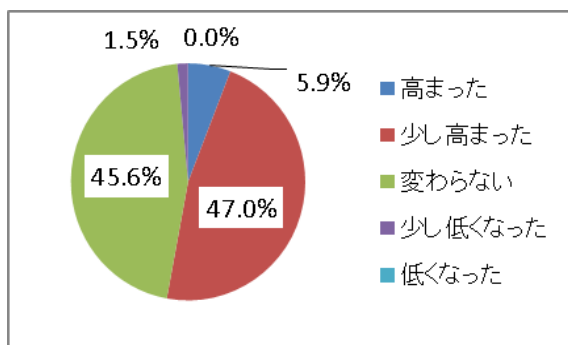


[図 7] 利用後の家庭での変化（保護者用）

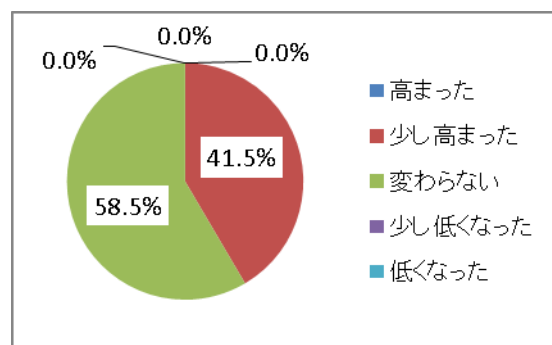
ウ 学習意欲について

学習意欲については、「高まった」と「少し高まった」を合わせた割合が学校用では52.9%〈図8-1〉と高かった。しかし、保護者用では41.5%〈図9-1〉にとどまった。当所での学習タイムでは、平成26年度から導入したやまびこプリント（算・数・英）に児童生徒はこつこつと取り組む。本人に応じた課題を提示していくことで学習に前向きに取り組むことを保護者には伝えていきたい。

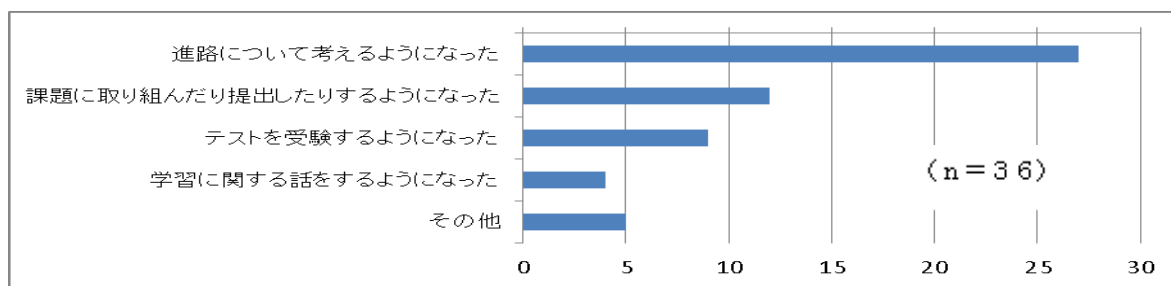
具体的な変化では、学校では「進路について考えるようになった」と進路に対する意識高揚の回答が多い。また、家庭では「学校の課題に取り組むようになった」の回答が多く、ここでも課題を与えてやることの大切さが分かる〈図8-2、図9-2〉。



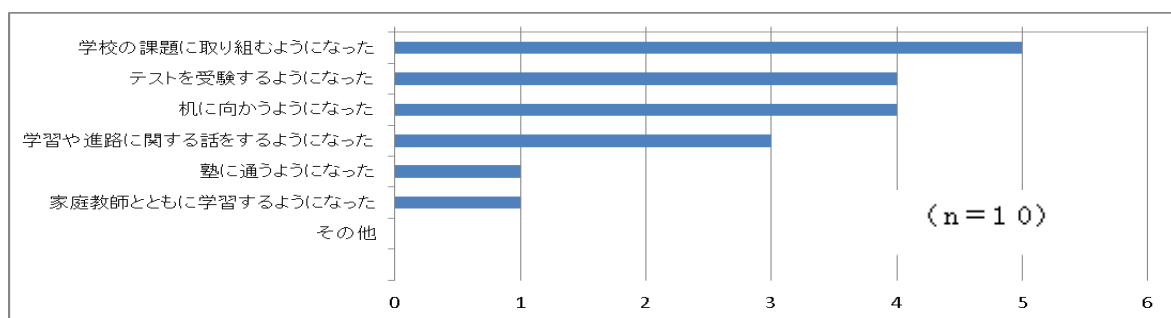
〔図8-1〕学習意欲（学校用）



〔図9-1〕学習意欲（保護者用）



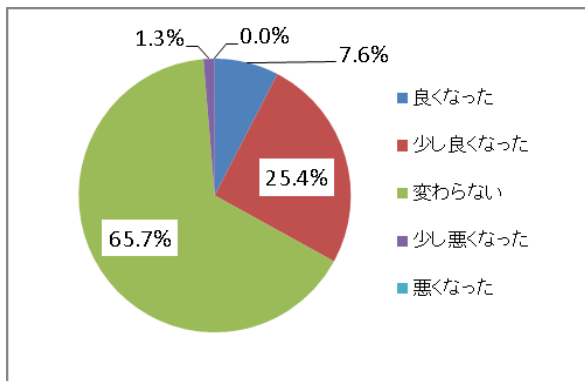
〔図8-2〕高まった内容（学校用）



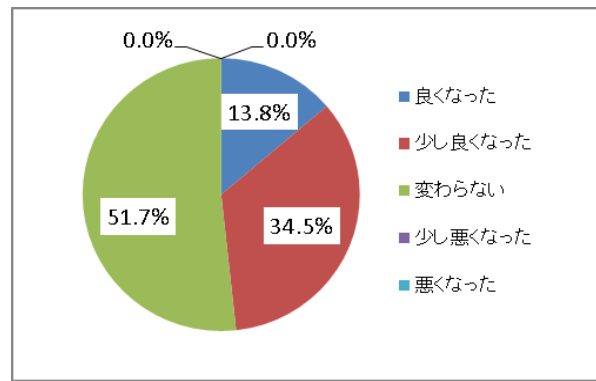
〔図9-2〕高まった内容（保護者用）

エ 人間関係について

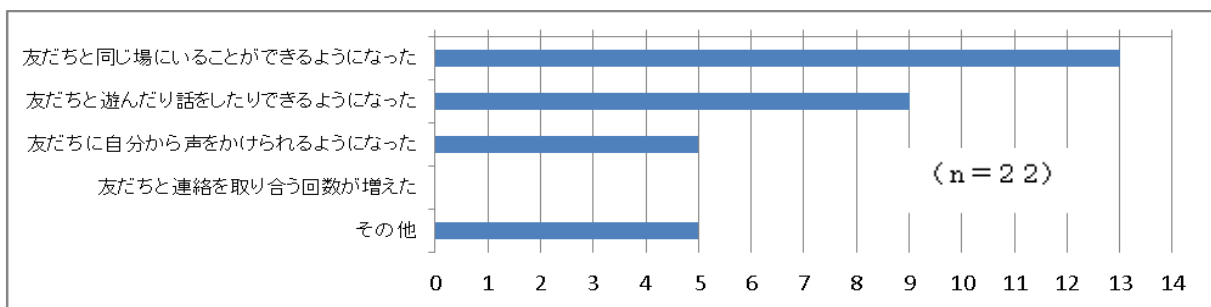
友だち関係の変化については、学校用では「変わらない」と回答した割合が、65.7%〈図10-1〉と高いが、保護者用では肯定的な回答をした割合が48.3%〈図11-1〉と半数近い。当所利用の児童生徒同士でつながったことが要因ではないかと考えられる。「どのように良くなったか」の問いに対して、学校、保護者ともに「友だちと遊んだり話をしたりできる」「友だちと同じ場にいることができる」が多い〈図10-2、図11-2〉。



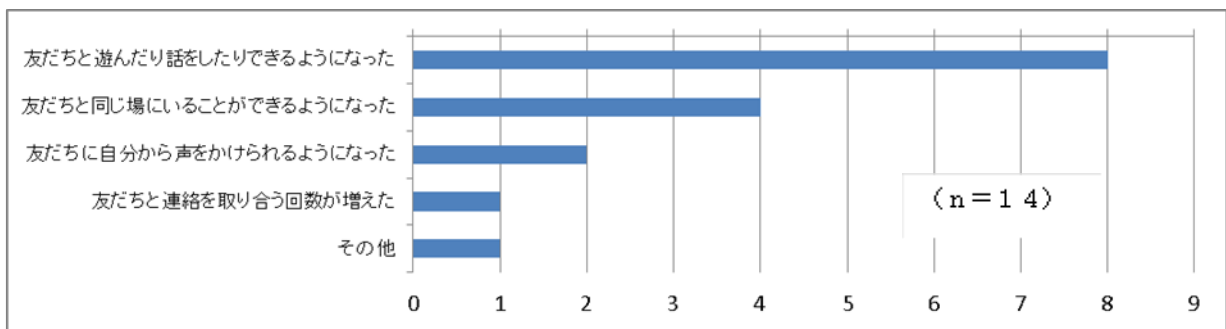
〔図 10-1〕 友だちとの関係（学校用）



〔図 11-1〕 友だちとの関係（保護者用）

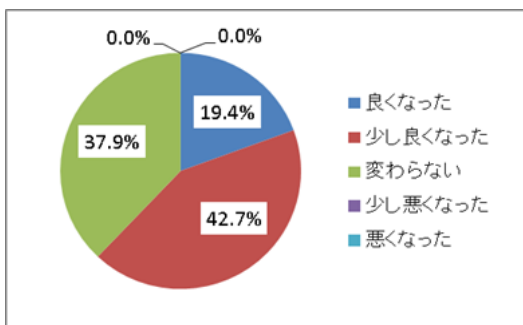


〔図 10-2〕 良くなった内容（学校用）

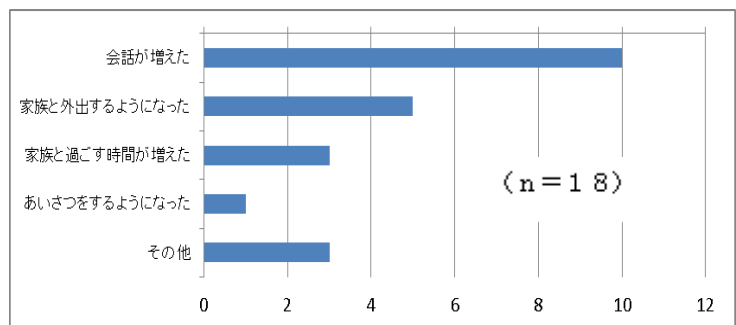


〔図 11-2〕 良くなった内容（保護者用）

家族関係の変化については、肯定的な回答の割合が 62.1%と〈図 12-1〉半数以上の家庭に改善が見られる。「会話が増えた」が最も多く、当所での仲間やスタッフとの生活が人間関係の広がりをもたらすとともに、家族と離れて生活することで子どもも保護者もお互いの関係を見つめ直す機会になったと考えられる〈図 12-2〉。

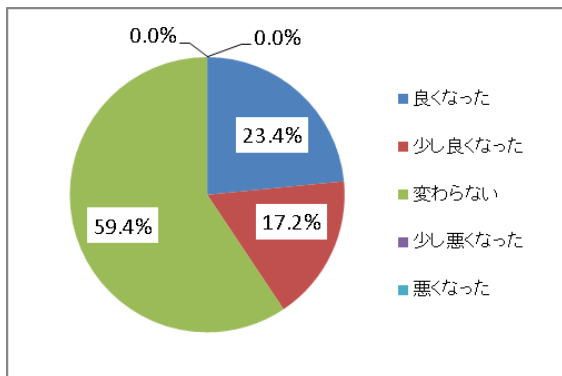


〔図 12-1〕 家族との関係（保護者用）

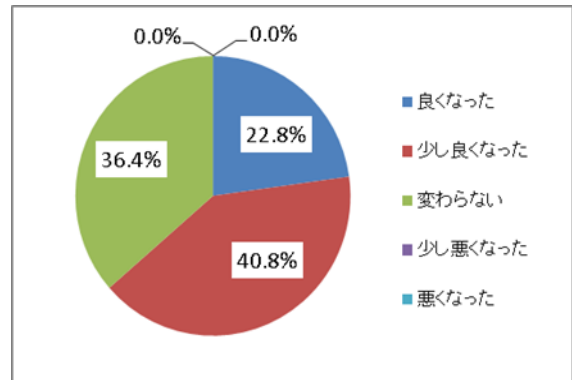


〔図 12-2〕 良くなった内容（保護者用）

学校と家庭との関係の変化においては、肯定的な回答の割合が、学校用では 40.6% (図 13)、保護者では 63.6% (図 14) と、学校より保護者の方が変化をやや強く感じている。学校からの働きかけに対する子どもの小さな変化を、家族の方が敏感に感じ取ることができていることが伺える。



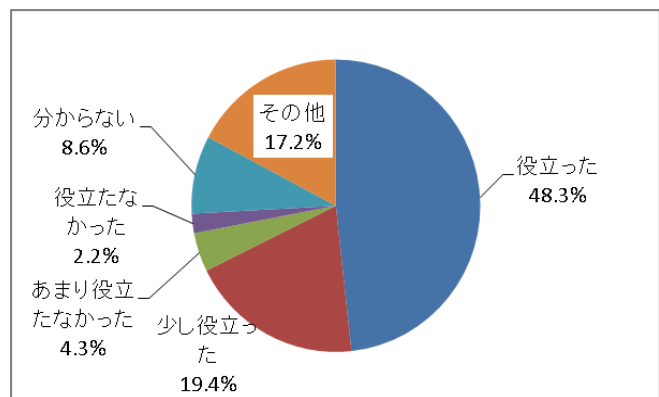
〔図 13〕 学校と家庭の関係 (学校用)



〔図 14〕 学校と家庭の関係 (保護者用)

オ 当所の利用の有効性について

「当所の利用が不登校の改善に役立った」(少し役立ったを含む)と回答している割合が、67.7% (図 15)と高い割合であった。学校復帰に向けての支援として、当所の果たす役割は大きいことが伺える。



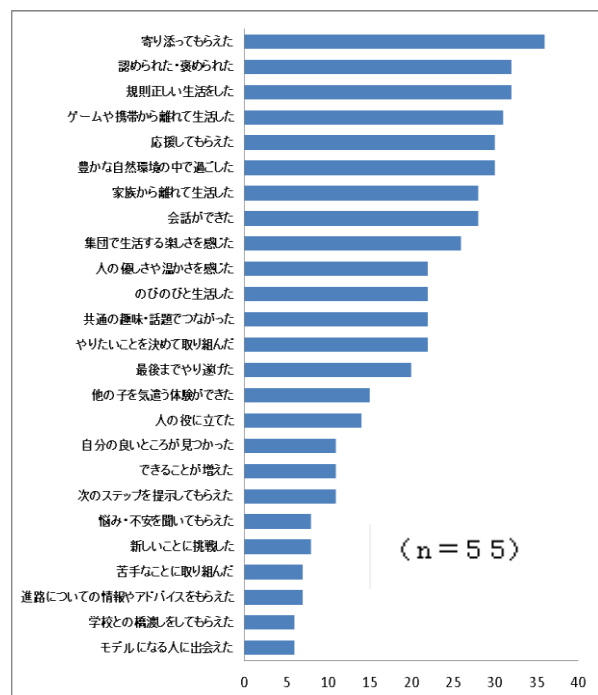
〔図 15〕 当所の利用の有効性 (保護者用)

カ 効果的なかかわりについて

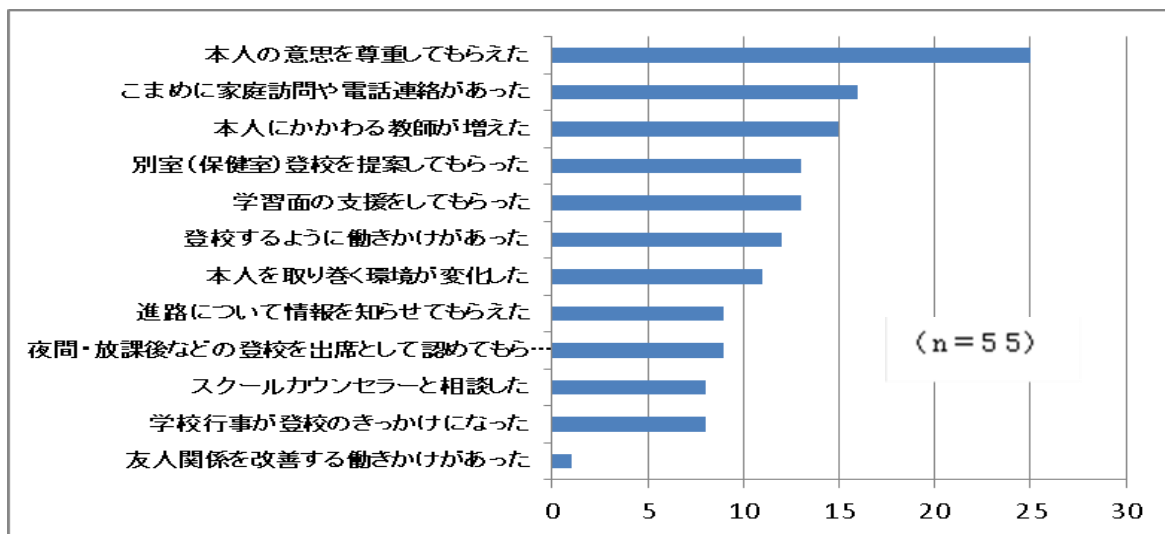
当所・学校・家庭それぞれにおいて、子どもたちに対する効果的なかかわりについて調査した。

まず当所のかかわりについて「寄り添ってもらえた」「認められた・褒められた」「応援してもらえた」等の他者からの肯定的な評価が上位にきている。スタッフやメンタルフレンドとのつながりや集団での宿泊生活により、自己肯定感や自信の回復につながったことが効果として大きいと考えられる。

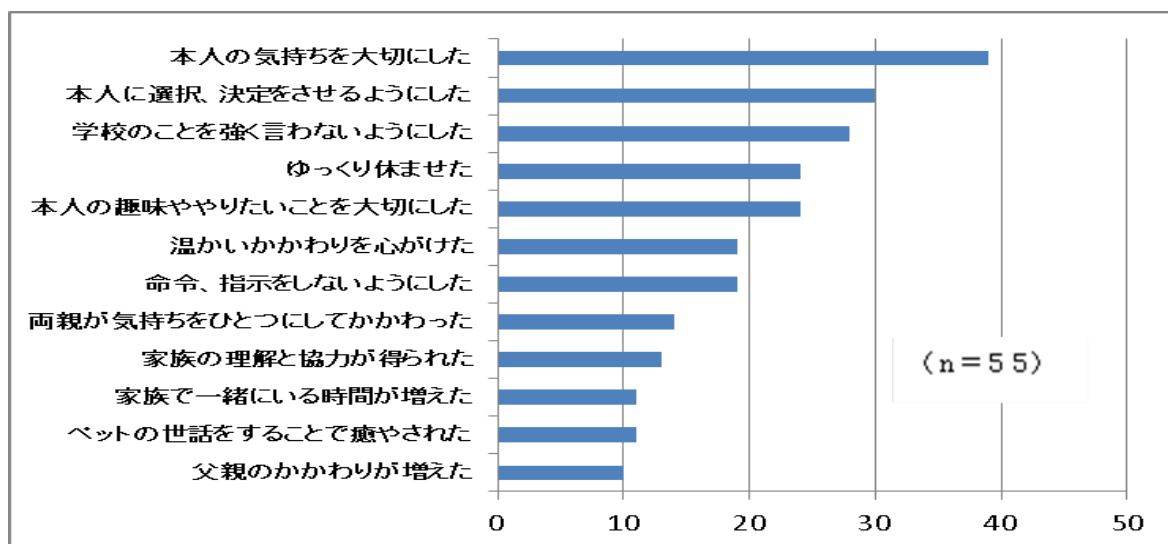
「規則正しい生活をした」「ゲームや携帯から離れて生活した」など日常生活から離れた宿泊体験に魅力を感じた意見が多かった。言い換えれば、生活の昼夜逆転現象に悩む児童生徒や保護者が少なくないことを物語っていると考えられる。



〔図 16〕 効果的であった当所のかかわり (保護者用)



〔図 17〕 効果的であった学校のかかわり (保護者用)



〔図 18〕 効果的であった家族のかかわり (保護者用)

次に学校からの効果的なかかわりとしては、「本人の意思を尊重する」「本人にかかわる教師が増える」ことが重要であると再認識できる結果となった。また、別室（保健室）登校をあげる回答が多く、学校における居場所作りも重要であると言える（図 17）。

家庭においては、「本人の気持ちを大切にされた」「本人に選択、決定をさせるようにされた」「本人の趣味ややりたいことを大切にされた」など、本人の意思を尊重し自己選択・自己決定させることの大切さを再確認できる結果となった。また、「学校のことを強く言わないようにされた」「ゆっくり休ませられた」など、本人の気持ちに寄り添いながら待つ姿勢が効果的であったことが伺える（図 18）。